
こてつ物語 7

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こてつ物語7

【Nコード】

N8647S

【作者名】

yuki

【あらすじ】

こてつ物語の七話目。

良平から御子の様子がおかしいと相談された礼似と土間。どうやら御子には何か隠し事があるらしい。千里眼への罪悪感から、極端に隠し事を嫌う御子の秘密を、礼似は何とか聞き出そうとする。

この話は自分のブログに連載後、一部を抜き出してこちらに載せています。

「ふうん。結構片付いたじゃない。この部屋にも慣れたみたいね」
土間が部屋をぐるりと見まわしながら言った。和装コートを脱ぐと、派手な着物が現れる。

「なあに？　どこかの帰りなの？」

香と暮らすためにあらためて借りた新しい自分の部屋へと通しながら礼似が聞くと

「違うわよ。今日はこの後久しぶりに店に出ようかと思って。このところ組の方にかかりきりだったから」

と、土間は機嫌よく答えた。土間は自分の店「クラブ・ドマンナ」の仕事が一番の息抜きなのだ。

「すいませんでした。お呼び立てして」先に来ていた良平が、礼似の部屋で頭を下げた。

「いいけど。珍しいわね。良平が私達に相談事なんて」土間も意外そうな顔をする。

「それに、御子には内緒にしろだなんて。あんたなんかやらかしたの？　……浮気でもした？」礼似がからかう。

「ふざけられても困るんですが。本当に参ってるんですから」良平はため息交じりだ。

「良平が御子の事で相談しなきゃならないなんて、以外だわ。香は？」土間が礼似をけん制しながら聞く。

「倉田さんの所に行ってる。一旦ここに帰って、私と仲居の仕事に行くけどね。土間が忙しくなった分、香が穴埋めしているわ。あの子が器用な子でよかった。ひと月であらかたの仕事はこなすようになったわ。情報収集のいい訓練にもなるしね。手くせの悪さが難点だけど。うかつに目が離せないわ」

「癖を直すのは大変そうね。まあ、可愛い妹の事なんだから、しっかり面倒見るのね」土間はのんきに言う。

「分かってるわよ。土間に言われなくても、香の事は何とかしようとは思ってたんだから。あんたが先にお節介を焼いただけ」内心感謝はしているのだろうが、素直に言わないのは礼似らしい。

「でも、引っ越しはいい機会になったでしょう？ 形式って、バカにしたものじゃないわ。時には物事に覚悟やけじめをつけてくれるから。うちは古いから、杯を交わしたりするけど、そういう事って意外と大事なのよ」

「まあ、ね。香も何だか素直さが出て来たしね。で、その香もいない事だし、何？ 御子がどうしたっていうの？」
さっそくストレートに聞かれて、良平も一瞬躊躇した表情を見せたが、すぐに聞いてきた。

「ちよっと最近、御子の様子がおかしいんです。なんて言うか……俺、避けられているような気がする」

「なに？ ひよっとして、御子ったらあんたが一人であきらめかけた前の件を、まだ引きずってるの？」

ひと月前に良平が自分を犠牲にして御子を助けようとした事を、御子は不満げにしていた。

「いや、それはもういいんです。多分。それに、そういう事で怒ってる感じじゃないんです。むしろ、何か悩んでいるというか、俺に何か隠してるというか」

「隠し事？」土間が驚く。

「御子が良平に？」礼似も目を丸くした。

「ありえない！」二人の声が合奏する。

御子は千里眼の持ち主ゆえに、こういうことにはすこぶるデリケートだ。何かの拍子に相手の心を読み取ってしまった時の用心のためか、自分の事は可能な限りさらけ出そうとしているところがある。もうそれは殆んど無意識に近いくらいだ。まして良平に対してはその気持ちや他の人間より、ずっと強く働いているはず。だから二人とも、御子に話した内容は殆んど良平にも伝わっている物として、受け止めているのだ。

その御子が、良平に隠し事をしているというのは、二人にはちょっと考えつかなかった。

「まあ、普通のカップルなら、一緒に暮らして数カ月したら互いのアラが見えてきて、幻滅するのはよく聞く話だけだね。あんたたちじゃ、今更考えられないし。まして隠し事……見当もつかないわ」土間が眉間にしわを寄せる。

「御子が隠さなきゃならない事なんて、まず、無いはずだけど。気のせいじゃないの？良平」礼似も同意する。

「そりゃ、俺だって、そう、思いたいですよ。同じ組でもう長いこと暮らしてきたんです。お互いにたいていの事は知ってる。でも、最近明らかに俺に対する様子がおかしい。ぼうつとしているから、どうしたのかと聞いても、なんでもないとか言わない。気分や体調の事を聞いてもはぐらかす。時々会話を不自然にとぎらせたりもする。こんな事は初めてだ。二人とも、何か気付いた事とかありませんか？」

「そうは言っても、私は最近御子とゆっくり会った事が無かったから。どうしても組の事にかかりきりで」

土間も以前のように仲居の仕事に出られる訳ではない。会長に呼び出されなければ、なかなか御子や礼似と個人的に会って話をする機会は無くなってきている。

「そうでしたね。すいませんでした。で、礼似さんはどうです？」

「ごめん、良平。私も仕事中は香に仕事を教えたり、手くせの悪さを見張ったりするのに精いっぱい」

「御子はお二人に何も相談したりはしていないんですね？」良平は殆んど睨むようにして聞いてきた。

そうか。「相談」というのは言葉のあやで、良平は、自分達が御子から何か聞いていないか、確認するために呼びたてたのか。だか

ら御子には内緒なんだ。ここにきて二人ともようやくそこに気がついたが、残念ながら、本当に二人とも何も聞いてはいないので、顔を見合わせて困惑するばかりだった。

その様子を見て、良平も納得した様だ。と、同時にがっかりもしているようだが。

「まあ、本当に何か隠したとしても、大したことじゃないんじゃない？　小さな事で、いちいち良平に心配かける事もないと思って、口にしないだけかも知れないし」土間はさりとさういう。

「そうよねえ。御子にだってプライベートを守りたい気分るときだってあるはずよね。今や、四六時中二人で一緒にいるんだから。女心だと思って、黙って見守っていたら？」礼似もなんでもない口調で答える。

「……」良平に返事はなかった。絶対に納得はしていない。それでも「すいませんでした。つまらない事でお時間をとらせて。分かりました。もう少し様子を見てみます。そのうち、あいつの方から話してくれるかもしれません」と言って、礼似達の部屋を後にした。

良平が出ていくと、二人はあらためて顔を突き合わせて話します。

「で、どう思う？」礼似が口火を切る。

「良平に話せないなんて、よっぽどの事ね。御子はああ見えて、肝が太いし」土間も困惑しているようだ。

御子は千里眼のせいで、人の悪感情も見せつけられて生きて来た節がある。見ないようにすればしたで今度は自分が心を開きにくくなる。だったら一度、全てを認めた上で自らの価値基準と照らし合わせて、善悪の判断をつけ、時には感情を共有する事で相手の理解しようとしている。時には自分をさらけ出し、時には相手の感覚まで共感する。だから御子は肝が据わっている。表面の言葉に踊らされない、度胸と強さがあるのだ。

その御子が全幅の信頼を寄せているであろう良平に、隠さなければならぬことがあるというのなら、結構事は深刻そうだ。

「これは礼似が直接御子に聞いただすしかなさそうね。ほら、あん

た達って、特別だから」土間は意味ありげに礼似に問いかける。

「土間だって、人の事は言えないと思うけど。私達は、訳ありの厄介者だったのは一緒でしょ？」

「それはそうね。でも、やっぱりあんた達は何かが特別だと思うわ。憶えてる？ 私達が初めて顔を合わせた時のこと」

「忘れる訳ないわ。それぞれの組から私達を選ばれて、これから各組が連携できるかどうかと、迫られたんだから」

「そうよ。それなのに礼似、あんた、あの場で行ったのよね。詐欺師は返上する。もう、嘘はつかないって。これから仕事を任されるって時に」

「別に詐欺師として呼ばれた訳じゃないんだから、かまわなかったでしょ？」

礼似のむくれ顔に土間が軽いため息をついた。

「まったく、あの時はあんたの度胸の良さに舌を巻いたもんよ。こつ組の組長室で、周りによく知らない組員だらけ。そのど真ん中で、ああも自分をさらけ出せる人間がいるなんて、思いもしなかったから」

土間は懐かしそうに話しながら、出されたお茶をすすっていた。

「あら、そういう土間だっていたいしたものじゃない。あの場で刀は持たないって宣言したんだから。これからこつ組のために働かなきゃならないって、分かっている場所だったのに。いい度胸だわ」

自分だけ特別扱いされて、礼似は言い返してきた。

「最初にはつきり宣言しておいた方がいいと思ったのよ。それなりの自信はあったし。でも、あの時あんたが、御子に心をごまかす気はないって言ったのは、結局正解だったわね。あれで御子を感じ取った安心感は、相当大きかったはずだから。私じゃハルオの事が引っ掛っていて、あんな台詞は出なかったわ」

「私だって組む相手があんた達で心強かったわよ。御子には嘘をつく必要はないし、土間なら私の暴走を止められる。なんの躊躇も必要が無かったんだから」礼似も今ならさらりと本音が言える。

「だから、あんたと御子は特別なのよ。あんたは嘘をつかなけりゃ生きていけなかった事に、ほとほとうんざりしていたみたいだし。し、御子は、自分の能力に罪悪感をずっと持っていたみたいだし。それが、あの時二人とも直感したんでしよう。この相手なら、自分達は呪縛から解き放たれるって」

「大げさに言うわね」礼似が思わず笑った。

「大げさなんかじゃないわ。私は女になる事で、自分の呪縛から逃れる事が出来た。でも、あんた達はそうはいかない。特に御子は、自分じゃ絶対に逃れようがない能力を持っている。人って、自分さえも無意識のうちにごまかさずにはいられない程、キレイな生き物じゃないわ。そんな所を何度も見てしまっていたら、普通なら人間不信どころか、自分自身にも不信感を抱くでしょうね。御子は、真柴組にずっといたからこそ、生きてこられた。でも、組の外の人間にかかわるのは、相当プレッシャーだったはず。だけど、あの場で出会ったのは礼似、あんただった」

「土間もいたじゃない」礼似は笑うのをやめている。

「私はダメ。あの時はハルオの事で頭がいっぱいだったし、そのせいで御子に脅えていた。出会ったのが私ひとりだったら、御子は潰れていたかもしれない。礼似、あんたがいたからこそ、私達は組む事が出来たの。あんた達二人は、特別な組み合わせなのよ。御子が良平に言えない事があるのなら、話す事が出来る相手は礼似、あんたしかないわ。」

土間は湯飲みをもてあそびながら、お茶を見つめている。

「分かったわ。私が御子に、問いただしてみる。一人で悩ませておくのも、なんだしね。でも、本当に誰にも言えないことだってあるから、言ってくれるとは限らないけど」

「かまわないわ。私達はいつでも御子の話を聞く気があるって事が、

伝わればいいんだから」

そういつて土間は一気にお茶を飲み干すと、立ち上がった。

「そろそろ行かなくちゃ。業者が来る時間に合わせないと」そそくさと玄関に向かおうとする。

「土間」礼似がその背中に声をかけた。

「何？」土間が振り返る。

「御子、きつとあの時気づいていたわ。あんたが脅えているのは御子自身にじゃない。我が子を守り切りたいう、あんたの親心が、御子の能力に脅えていたんだってことに。だから私達は組めたのよ」

「それも御子に聞いいてよ。やっぱり、あんた達は特別だわ」土間は笑って部屋を出ていった。

礼似から話があるとメールを受け取った時、御子はすぐに「良平だわ」と、思った。きつと、土間や礼似に、何かいったに違いない。いつもなら良平にさっそく文句の一つも言えるのだが、今回は隠し事をしたのは自分の方だ。

いや、本当は隠すつもりではなかったが、言いそびれてずるずる過ごしたというのが正しいところ。でも、良平に心配かけているのは私の方だし。今だって、どんな選択をすればいいのか迷っている。迷いがある時は、自分の一番本音に近いものを選択すれば、たいいていの事はよい方向に向かうのだが、今度ばかりは自信が無い。

自分がこれだけ自信が無く、迷いがぬぐい取れずにいると、良平に言っても自分の迷いを押しつけるような気がして、何となく言い出しにくいのだ。それに……

呼び出された神社の境内に向かう。御子が子供の頃に育った神社だ。なんとなく足が重くて、少しだけ約束の時間を過ぎてしまった。礼似は先に来ていたようだ。たぶん時間ピッタリに来たのだろう。こういうところは以外にきっちりしているのが、礼似らしい。普段

の行動や、言動が大胆な分、こんな事で気をまわしているのだ。

「ごめん。遅れた。なあに？　こんな妙な所に呼び出すなんて」自分から先に礼似に聞く。

「いきなり謝るなんて、しおらしいじゃない？」礼似はいつものように軽口をたたく。

「こんなところに呼び出すからよ。勿論、百も承知でそうしたんでしょ？　人が悪いわ」御子は口をとがらせた。

御子はここで拾われ、神主に育てられ、その親族に拒否されて真柴組に育てられた。因縁深い場所だ。

「あんた、ここで結婚式を挙げる事にこだわってた。土間の心を覗いた時も、ここに来た。だからここが一番あんたの心に響く場所だと思ったのよ。図星でしょ？」礼似が御子の目を覗きこむ。

「あんたといると、本当は千里眼なんて大したことじゃないんじゃないかと、本気で思えて来るわ」

「大したことじゃないのよ。少なくとも私にとってはね。あんたが勝手に自分の力を否定しているだけ。世間は広いわ。私みたいな人間だって、結構いるのよ」

「そうね。あんたや良平。土間もそうだし、お義父さんもそう。私の周りはその人ばかり。私、運がいいのね」

「運ばかりじゃないと思うけど。それで、あんたは何を良平に言えずにいるの？」礼似はストレートに聞いてきた。

礼似の言葉があんまり真っ直ぐなので、御子は一瞬躊躇しかけたが、かえって思い切りが着いて答えられた。

「察しはついてるんでしょ？　……子供が出来た」

「やっぱり。あんたが良平に言うのをためらうことって言ったら、そのくらいだもんね。しかもためらうって事は」

「そう。何だか勘が働くの。この子も千里眼、持ってる。確信してる」

会話が途切れる。二人とも言葉を探すのに手間がかかっている。「今、言ったよね。私達にとっては大した事じゃないって」礼似は

ようやくそういった。だが、空々しさを感じて、すぐに口をつぐむ。礼似も両親の罪による偏見を受けて来た。世間の風の冷たさも知っている。まして千里眼。表面の冷たさだけでなく、人の本音の醜ささえも見えてしまう。傷つき方はまるで違う物があるはず。しかも、御子と良平は夫婦そろってこの世界の人間だ。二人がこの世界で生きていく限り、その風は一層冷たい物があるだろう。

「正直、迷ってるの。今のまま私達が育てていいのか。せめて、私の千里眼を引き継いでいなければ、素性を隠すとか、堅気の人に育ててもらう手もあったんだけど、おそらくそれは難しいでしょうね。ハルオですら、ウチで引き取ったくらいだから。下手をしたら、この子だって狙われ続けるかもしれない。千里眼なんて、突然変異的なものだと思っていたのに」御子は堰を切ったように話した。

「良平に、ちゃんと話さないで。迷うにしても、二人で迷わないと」
「私、良平には、組を継いでもらいたいのよ」ここだけは譲れない。
そんな表情で御子は言った。

「それなら、良平と一緒に育てるしかないじゃない。迷う事なんてないわ。真柴で子供を守ればいいんだから」

「それで子供は一生白い目で見られるの？ 人の心が見えるだけでも十分辛いのに、さらに偏見の目を注がれるわ。どれだけの重荷を背負わせるか、見当もつかない。せめて片親だけでも、堅気の暮らしをしていけば」

御子の言葉に、礼似は息を飲んだ。

「ちよっと。まさかあんた、一人で足洗って、子供を育てるつもり？ ふざけんじゃないわよ！ あんた、その真柴に育ててもらったんじゃないの。堅気が何よ！ 親の事情や、生まれ持った特徴なんかで、人にレッテル貼りつける連中の方がおかしいんじゃない！」

「世の中はね、そのおかしい方が正しい事になってんのよ。私は子供を堅気の子として育てたいだけ」

「堅気で育てたって、千里眼でなくなる訳じゃないわ。傷つく時はどうしたって傷つく。世間の連中を、全員叩きのめす訳にもいかないんだから。あんた、今さら真柴を裏切ろうっていうの？」

「真柴は良平がいれば大丈夫よ。こてつ組の傘下入り後、組も安定してきたし、華風とだって、良平ならうまくやってくれる。私がいなくてもいいわ」

「そういう事を言ってるんじゃないって分かってんでしょ？ そんなことしたら、あんたは真柴での、自分の人生を否定することになる。そしたら、あんたを見守ってきた人たちを、どれだけ傷つけると思ってるのよ！ それに、良平の事はどうする気？ その子はあんなだけの子じゃない。良平の子よ！」

ここで、初めて御子の表情が揺れた。気負いの向こう側の素顔をのぞかせる。

「だから、迷ってるんじゃない。良平は、受け入れられるかしら？」
「あんた、よりにもよって、良平を疑ってんの？」礼似是怒りと戸惑いがないまぜになる。こんな御子は初めてだ。

「あんたは知らないのよ。男が父親になるってどういう事か。女は子を産めば、ほとんど自動的に母になる。でも、男はそうはいかない。真柴はね、ああいう組だから、訳ありの子をいっぱい見て来た。生んだ子に問題があれば母親は一気にたくましくなる。でも、男は急に強い父になる訳じゃない。強い男が、強い父親になるとは限らないのよ。悩み、苦しみ、戸惑い、乗り越えられない部分も出て来る。だからうまくいなくて、ウチの門をたたく連中が、後を絶たないの。まして私は良平に組を継いでほしい。守り抜いてほしい。その上に千里眼の子の父親になる事なんて、本当に出来るのかしら？」

「出来るも何も、するべきでしょ。親なんだから」言いながらも戸惑いが抜けない。御子に見透かされていると思う。

「出来ない人間が多いから、ウチみたいな組があるのよ」御子は皮肉な笑顔を見せる。

「そうか。あんた、怖いんだ。口先でどういっても、良平にその子が厄介者だと思われたり、拒絶する心を見るのが怖い。だから、話す事も出来なけりゃ、自分達を守ってほしいとも言えないんだ。この、意気地なし！」

御子はどう見ても、情緒不安定な状態だ。こんな場所に呼びつけるんじゃないかった。自分も今は、御子の態度にカッカしている。家族をろくに知らない自分に、当てつけられているような……いや、明らかにこれは当てつけた。

「私、良平に言うわよ」礼似是むっつりという。

「勝手にすればいいわ」御子はそっけなく返す。

「そうだ、土間から伝言があったんだ」立ち去りぎわに、礼似是思

い出した。

「何？」

「土間に初めて会った時、ハルオへの親心から、あんたの力に土間
が脅えたのに、気づいていたのか？ って」

「じゃあ、こう言っという。そんなの自分で聞きに来な、 って」御
子はそう、言い返した。

「で、喧嘩したまま、ここに來たって訳？ やれやれ」

礼似から、一通りの話を聞き終えると、土間は容赦なく言った。

営業中の「クラブ・ドマンナ」に、礼似は御子と言いいあった勢いそのままに飛び込んで來たのだ。

にもかかわらず、土間は比較的すんなりと礼似の前に姿を現した。おそろくだいたいの予測をつけて待っていたに違いない。店の奥の、落ち着けるテーブル席に、礼似を座らせる。礼似の方も、頭に血を登らせたまま、事の次第をまくしたてていった。ついでに酒の方も随分進んでいたが。

「人に面倒事を押しつけておいて、何？ そのいい草。おかわり！」
礼似がグラスを突きだした。

「ボトル追加ね。料金、二割増しになります」土間がにこやかに言う。

「ちょっと！ 何よそれ！ わざわざ報告に來た友人から、金取る気？ しかも二割増しって」

「何が報告よ。単に愚痴をこぼしに來ただけじゃない。おまけに、御子に話を聞く態度を見せるどころか、話の勢いで喧嘩して、人の質問拒否されて、営業時間内にこの私をご指名だなんて、二割増しでも安いぐらいだわ」

土間は冷静に伝票に酒代を書きこんでいく。

「人の傷心をカモに商売っ氣出さないでよ。ちょっと！ 誰も吞まないなんて言っていないわよ！」

礼似は土間からボトルをひったくると、自分で栓を開けてグラスに注いだ。

「なーにが傷心よ。二人とも感情的になって、本音が出ただけでしょ？ まあ、それでいいんだけど。あんたは御子に突っかからずにいられないし、御子はそうされると動揺が隠せなくなるんだから」

礼似が勢いよく注ぐので、汚れてしまったテーブルを拭きながら、土間は淡々と言った。

「何よ、そっちこそ、ちゃっかり人を利用してるんじゃない。これで二割増しなんて暴利だわ。むしろ二割、引いてもらわなくちゃ」礼似はグラスを煽りながら文句を言った。

「あら、あんただって、御子の悩みの原因がはつきりして、よかつたんでしょ？ 自分で聞かなきゃ、我慢できない癖に。でも、まあ、その働きに免じて、一割増しにしておこうか」伝票を片手に土間も言い返す。

「あんた、ハルオの事があるから真柴に恩を感じて、御子に突っ込めないから、私を使っただんでしょ？ 利用された上に、金まで余分に取られてたまるもんですか！ やっぱり、二割引！」

「今更ハルオは関係ないわ。礼似が相手の方が、御子はボロが出やすいと思っただのよ」

おっと、しまった。ハルオを引っ張り出されて、土間もつい、口が滑る。うー、営業時間中に拘束(?)されたのに。

「ほら！ やっぱり私を利用する気マンマンだったんじゃない。値引きしなさいよ」礼似はここぞとばかりに突っ込んで来た。あーあ、仕方ないか。

「ここのお酒は商品なの。二割も引いたらやってらんないわ。ギリギリ、一割引！」

妥協しながらも、これ以上はなんとしても引かせるもんかと、土間も目に力を込める。

「ちえっ。何としても金は取るのね。分かった。一割引で手を打つわ。まったく、親ってどうしてこうなのかしら？ 子供が絡むと、ホントにもろくなるわ。夫婦の信頼まで揺らぐなんて」

「ちよつと揺らぐぐらい、誰にでもあるわ。それに、親がもういんじゃないわ。人なんて、みんな弱い物なのよ。だいたい、信頼なんて本音丸出しで作るもんじゃない。本音を飲みこむ思いやりが作るの。会長のところがいい例じゃない？ 何が何でも、自分の家業を

明かさずにいるんだから」

「でも、御子は本音が見えるのよ」

「物事はね、見る角度で受取り方なんて変わるの。御子は今冷静じゃないから、一方的なものの見方しか出来なくなっているだけ。今頃は考えも変わってるわよ。きっと」

実は三人が組んだばかりの頃は、それぞれが互いを信用できずに苦しんだ。まして、千里眼の御子は一層、心を閉ざそうとしていた。互いの心をつないだのはひと仕事をようやく終えた時だった。

「私達は、三人で組んでから気がついたはずよ。人の本音にだって、色々あるって。おおもとの人間性が信頼できれば、多少、その時の気分には振り回されたって、たかだか知れているのよ。ちょっとぐらい、その場の本音が不快だったからって、脅える事は無いんだわ。知ってしまった本音よりも、それを飲みこんだり、受け入れたりしようとする、心の動きの方が、ずっと大事なのよ」

やや、手元が怪しくなってきた礼似に変わって、土間がグラスに酒を継いでやりながら言った。

「そうね、そうだったわね。御子は憶えているかしら？ あの際の気持ち」礼似がグラスの氷を見つめながら言う。

「忘れるもんですか。たとえ記憶の上で忘れてしまっても、きっと今に思い出すわ。ああいう気持ちは忘れられるものじゃ、ないはずよ」

「そうよね。御子はそんなに、ヤワじゃないわよね。子供への心配ごとで一時的に困惑しているだけよね。まったく、千里眼なんか持っていると、何でも先読みして余計な心配するんだから！ 一人でグダグダ考えてるからいけないのよ。とっとと良平に白状すればよかったんだわ」礼似はやや、いらついた態度を見せるが、

「あら、そんなの心配いらないわよ。きっと御子、今頃良平に白状してるわよ」土間は自信ありげに言った。

「よく、分かるわね？」

「あんたが良平に話すって言った以上、観念したはずよ。どうせなら自分の口で話したいに決まってるじゃない。それに、あんたに話した事で、覚悟も決まったはず。あの二人の事だもの、きちんと話

し合えばちゃんといいい解決の仕方をするに決まってるわ」

「それもそうねえって、ちょっと、土間！」礼似は酔いからさめたように声をあげる。

「なに？」

「それじゃ、あんた、御子の事をあおらせるために、私を差し向けたんじゃないの！」

「あら、私、あんたにあおれなんて一言も言ってないわよ。御子の悩みを聞きだして、私の伝言を伝えるように頼んだだけ。あんたが勝手にカッカして、御子をあおっただけよ」土間はのんびりと返事を返すが、おそらく予想がついていたのはその顔色を見れば分かる。さっきも言っていた。御子は私相手の方がボロが出やすいって。

「あんたって、人を利用するのがトコトンうまいわね」礼似はあきれ気味に言った。

「だてに、経営者や、組長なんてやってないわよ。言ったでしょ？」

「あんた達は特別なんだって」

「特別ねえ。私達は三人とも、因果な組み合わせだとは思うけど？」

「あんたこそ、人を手駒のように利用してないで、御子に正面からぶつかったら？ 御子も言ってるじゃない。自分で聞きにきなって」

「御子らしいわね。そうね、聞きに行かなくちゃ。でも、行ったらもう、解決してるでしょうね。どうせ御子の事だから、良平の本音を覗きそうでビクついてるんでしょうけど、そのくらいの事で、良平がうろたえるもんですか。御子も分かっているはずなのに、自分が生みの親を知らないものだから、変に脅えているんだわ。すぐに分かることなのに。血は水よりも濃いつて」

「そうよねえ。あんただって、ハルオをずっと見守ってたんだものねえ」

「分かっくんじゃない。ね、私も一杯もらうわ。乾杯しない？」土間は自分のグラスを用意する。

「何に？」

「勿論、御子と良平に。それから」

「生まれて来る、子供にもね」
二人のグラスが合わせられると、チン、と、小いきのいい音が鳴った。

「子供が？ 本当にな？」良平が息を飲むのが分かった。

この瞬間だ。この瞬間が何より怖かった。ここを耐えれば……。

ここだけ、良平の心を覗きたい誘惑に耐えられれば、きつと、どんな感情をつきつけられたとしても、耐えられる。御子はそう思っ、目をつぶる。

今までだって、何度も話そうとした。今言おう、今こそ言おうと、何度も心に言い聞かせた。

こんなにおろおろしていたんじゃ、土間や礼似が気がついて、こっさりあきれていたかもしれないと思っていた。

その礼似について、弱音を吐いて、ムキになってしまった。たぶん、今頃土間にも伝わって、意気地のなさを笑っているのかもしれない。本当に、自分でも驚いた。私はこんなに意気地無しかったのかと。初めは単純に嬉しかった。結婚だの、家庭だの、子供だのなんて、自分には縁のないもので、下手にそう言う物にかわり合わないに越したことは無いとさえ、思っていた自分に、ものすごいプレゼントが届いた様な気がした。

良平と一緒にになったのだって、打算した訳じゃないけれども、良平が組を継ぐのにふさわしいと思っていた気持ち、安心感につながっていたのは否めなかった。長年の、仲間意識だってあった。

そこに、愛情が加わったからこそ、一緒になる決心が出来たのだろう。

だから、良平と、この組。この二つさえあれば、この二つを守る事が出来る人生なら、自分にとって本当に幸せな人生を送れるだろうと思っていた。他に欲しいものなんてないと思った。

ところが、いざ、子供が出来たかもしれないとなったら、こんなに嬉しいものだとは思っていなかった。

普通の女なら、ごく普通に受け止めるかもしれないが、まさか自

分にこんな幸福感が沸くなんて思わなかった。

自分には絶対に届くはずのない贈り物を受け取ってしまったような。そんな気さえた。

だって、私には、幸福な母親のイメージが無い。組に飛び込んでくる、組員達の母親は、嘆き、苦しみ、戸惑い、そして認めたり、見守ったり、頑として跳ねのけ続けたりしている。その姿は逞しいとしか言いようがない。

だから、フワフワとした、浮き立つような、無条件の幸福感を感じてしまうとは思ってもよらなかった。

幸福感と、高揚感。今だったら、この幸せを守るためなら、世界中が束になってかかって来たって怖くない。

ところがある時を境に、その思いが一転した。

自分はなんの意識もしていないのに、千里眼を使った時と、同じ感覚を受ける。それも突然に。

初めは勘違いだと思った。そう、思いたったのかもしれない。漠然とした不安が広がる。

すると、その不安を何かが受取っているのが分かった。増幅されていく。これは自分の感情ではない。

確信した。この子も千里眼だ。今はまだ、イメージが増幅されていくだけの状態だが、大切な存在であるはずの我が子に、自分の感情が筒抜けになっている、不快感まで感じ始めていた。この感情も、きつとこの子に伝わっている。不安はますます強くなっていく。

幸福な母親を知らない私が、千里眼のこの子に、幸福を伝える事が出来るだろうか？ いや、伝えなくてはならない。これからのこの子には、自分が味わって来た事と、同じ試練が待っているはず。

いいえ、同じですらない。実の母である私でさえも、不快感を感じている事が、この子を深く傷つけるだろう。

まして、男親の良平は、どう受け止めてしまうのだろうか？ これから産もうと言う私でさえ、これだけ不安が大きいのに。しかも、夫婦そろって裏社会の人間。世間はどれほどこの子を否定するだろうか？

なんだか、初めて、自分の事を捨てた両親の気持ちか、分かっってしまう気がする。

それでも、私の母は、私をこの世に産んでくれたんだ。

この世は悪い事ばかりじゃない。素晴らしい出会いだってきつとある。自分のように多くの出会いに恵まれるかどうかまでは分からないが、そういうものは、数で判断するものではないだろう。

それでも御子は不安になる。普通に情けをかけあえる、他人との出会いは喜びをもたらすだろうが、血を分けた親に対しては、どんな感情を持つだろうか？

自分が生まれた事を、受け入れてくれるだろうか？ たとえ、私に不快感を感じてしまっても、それは愛情とは別であることを、理解させる事が出来るだろうか？

いや、させなければならぬ。誰に出来なくても、私はやらなくてはならない。そうでなければ、この子は、辛い人生を送る事になってしまう。

血のつながった関係の、親子愛とは、果してどんなものなのだろう？ これまでは、血のつながりだけが親子じゃないと、本当に信じて来たが、ここにきて、御子は分からなくなっていた。

ましてこの子には、愛も伝われば、苦しみも伝わってしまうのだ。それに、これほどの問題を抱えた状況を、良平は、心から受け入れてくれるだろうか？

勿論受け入れてくれるはずだ。少なくともこの子が生まれるまでには。彼はそんな、情け知らずな男じゃない。

けれど、心は揺れるだろう。揺れて当然だろう。自分でさえ、こんな調子なんだから。

そしてその瞬間に、私はとても恐ろしいにもかかわらず、良平の心を覗きたくなるに違いない。きっと、それまでなかったくらいに。そのとき、私は我慢できるだろうか？そして、良平の言葉を心から信じる事が出来るだろうか？

そして我慢が出来なければ。自分に負けて、良平の心を覗いてしまったら、そして、その感情が否定的なものであったなら。

私はそれに耐えられるだろうか？良平と、今までどおりでいられるだろうか？

御子は、そこに心から恐怖を感じていた。だから、良平に伝えられずにいたのだ。

けれど、もう、覚悟がついた。礼似に全てを話してしまったから。自分の弱気まで見せてしまったから。

どうせ知らせるなら自分の口で。今、勢いの着いたこの時に。

そう思っ、礼似と別れてすぐに組に戻り、良平を部屋に引っ張ってきたのだ。

ただ、簡潔に伝えた。「子供が出来た。千里眼を持った子が」それだけをようやく言った。

言ってしまった以上は、もうどうしようもない。口にした言葉は戻らない。全てを受け止める以外に仕方がない。

御子は必死の思いで目をつぶる。「千里眼」と言っても、本当に目を合わせて心を覗く訳ではない。目は心の窓にはなるが、実際は相手の頭に浮かんだ感覚や情景を、自らの感覚として受取っているのだから、目をつむったからと言って、力を使わずに済む訳ではない。

それでも御子は反射的に目をつむった。懸命に自らの心を押し殺し、誘惑をはねのけようとした。思わず息まで止めてしまった。

だから、その瞬間、良平が笑っていた事に気がつかなかった。肩をゆすられて、初めて我に帰る。

「やった！　そうか！　なんだ、もっと早く教えてくれればよかったのに。御父さんには知らせたか？」

良平は、頬を高揚させながら、軽く息を弾ませている。

「まだ……」

「そうか、早く教えてやれよ。いや、まさか俺が人の親になるとは思わなかった！」

あまりの良平の様子に、御子は良平がきちんと話を聞いていなかったのかと思った。

「良平、ちゃんと聞いてくれたの？　この子、千里眼を持ってるって」

良平は表情を変えなかった。やや、目を丸く見開きはしたが、

「勿論聞いたさ。さすがは御子の子だ。親の血をそのまま継いだんだな。こりゃあ、楽しみだ」

「楽しみって。良平。この子、人の感情を知ってしまうのよ？　知りたくもない事も、これから山のように感じ取ってしまうのよ。この先どれだけ傷つく事か」

良平は、御子の言葉にややあきれたような表情を見せた。

「お前、そんな事を気にしていたのか？　それなら心配ないさ。傷なんて、何も感じない方がおかしい。傷の痛みが分かるから、幸福の感じ方も知る事が出来るんだ。空腹を知らない奴が、物を口にした時の喜びを知るか？　その味を実感できるか？　苦しみ？　おおいに結構。そんなの大したことじゃないと、俺が教えこんでやるさ」

「そんなに単純にとらえていいの？　これから子供の人生、背負って育てようって時に」

良平は笑いだしてしまった。少し、気持ちが高揚しているのかも

しれない。

「俺達がどんなに背負ったって、そんなもん、たかが知れているさ。子供の人生は子供のものだ」

良平は軽く息を整えると、あらためて御子に向き直った。

「なあ、女つてのは、どうしても、幸せってものは穏やかで静かで、波風の立たないものだと思いきみたいものなんだな。でも、実際はそうじゃないだろ？ 別に千里眼じゃなかったって、苦しい事はあるし、辛い事は辛い。だが、だからこそ分かる幸福も、山のようにある。俺達見たいな半端者が、どれほどの親になれるかなんて分からないさ。それでも子供なんて、自分で幸せを見つけて育つもんだ」
今度は御子の方があきれる。

「そんな、そんな考え方したら、無責任じゃない？ もっと子供の事を考えて……」

「考えてどうなるもんじゃないのさ、人生は。お前だってそうだろう？ 俺達は愛情を注いで、自分達の出来る事を精一杯やってやるだけだ。それしか人なんて、育てようがないのさ。何よりも、御子。お前自身がその証明だ」

「私が、証明？」

「そうだよ。お前は自分で、自分の生き方を決めて来た。どんなに人の心が見えようとも。そりゃ、多少は周りの人間に、いろんな事を教わっては来ただろう。しかし、それだって、お前が受け入れたり、納得したりして選んできた事さ。お前の子なら、間違いなくそういう事が出来る子になるだろう。俺達もそれを伝えたいと思うだろう。しかもその子は、この世の誰よりも俺達の思いを真っ直ぐに受け取れる能力を、生まれながらに持つてるんだぜ。こんなに嬉しい事があるもんか」

嬉しい。良平は確かにそう言った。今更良平の心を覗く必要なんてない。もう、これだけで十分だ。

「何だか、迷ってたのがバカみたい」

御子も、心からそう言った。これまでの不安が、霧が晴れるよう

に取り除かれていく。

「そうさ。まったくバカな事でこんない知らせを先延ばしにしたんだ。今日は、しっかり御馳走にしてもらわないとな。ああ、土間さんや、礼似さんにも謝らないと。どうせ、お前もあの二人にせつつかれたから、白状したんだろう？」

痛い所を突かれたな。御子はそう思いながらも、すっかり心が明るくなって、怒る気になれなかった。

苦悩があれば、喜びは、より大きい。今、自分でそれを実感していた。

「どう？ 良平とは仲直りしたの？」

土間はそういいながら、真柴組の事務所を訪れた。後ろから、そつと礼似もついてくる。

「失礼ね。良平と喧嘩なんてしてないわよ。ちよつと、報告が遅れちゃっただけで」御子はむくれて見せる。

「よつく言うわ。私が聞きださなかったら、ずっと隠しておこうとしていたくせに」礼似がさっそく茶々を入れる。

「まったく。あんた達、どうして素直に謝るって事が出来ないの？ そのうち、性格歪むわよ」

この期に及んで軽口を言いあう二人に、土間はあきれながら言った。

「あらあら。一番歪んでるのは土間でしょ？ 私を使うばかりで、自分は高みの見物を決め込んでいたんだから」

「まあ、そう言えない事もないわね。人づてで物をすませようなんて、ちよつと歪んでるかもね」礼似の憎まれ口に、御子まで乗った。

「はい、はい。こんな時だけ気を合わせないでよね。だからちやーんと、自分の口で聞きにきました。御子、あんた、私達が初めて顔を合わせた時、私がハルオの事を気にして、あんたに脅えていたって、気がついてたの？」

土間はあらためて質問した。

「ああ、そんな事もあったわね。あの時はそこまで深くなんて考えてなかったわよ。私の能力を気にして、脅える人なんて、沢山いたんだから、またかって思っただけ」御子はあっさりと答えた。

「そんな事だろうと思った。でも、おかげで私はハルオの事抜きで、御子を信頼できたのよね」

「あの時だって、私は言ったはずよ。勝手に人の心を覗くような真

似はしないって。私、そんなに言葉をいい加減には使わないわよ。本来、人って言葉を使って相手の気持ちを知らるものなんだから」

「そうよねえ。御子の方が、言葉で伝える大切さは、知っているのかもしれないわねえ」土間はしみじみと言った。

「そうよ。伝えたい事は何回だって、口に出して伝えなくっちゃ。あきらめたらそれまでよ。伝わるものも、伝わらずに終わってしまうわ」

伝えたい事は何度でも伝える。土間は昔の事を思い出した。ハルさんは、本当に伝えるべき事は、口癖のように言っても伝えてくれなかった。まるで、呪文のように。

「じゃ、今、ちゃんと伝えとくわ。あの時は私もむきになって悪かったわ。ハイ。これで恨みっこなしね」礼似が笑いながら言う。

「随分軽く済ませてくれたわね。まあ、私の方こそコソコソして悪かったわよ。でも、良平より先にあんたに知らせる羽目になったのは、ちよっと悔しいけどね」

「そこは自業自得。これに懲りたら、良平に無駄な隠し事なんて、二度としない事ね」礼似がぴしゃりと言った。

「そんなこと分かってるわよ。もう、二度と、こんな騒ぎは起こしません」

御子もなんだかんだあったものの、今は幸せそうな顔で笑っている。やっぱり御子の独り相撲だったんだろうな。土間と礼似もその笑顔を見て安心した。

「で、肝心の良平はどうして……は、はははは」礼似が奥から出て来た良平の姿を見て笑いだした。

良平は、大柄な体に御子のエプロンをつけて、掃除機を抱えながら顔を出したのだ。

「そんなにモロに笑うこと、無いじゃないですか」良平も恥ずかしげに不満を言う。

「もう、昨日からこんな感じ。私に何も持たせないのよ」御子はやれやれという顔をする。

「俺なんかましな方です。お義父さんなんか、御子が身をよじっただけでも大騒ぎだ。先が思いやられる」

土間も礼似もくすくすと笑いが止まらなくなってしまった。まったく、真柴組らしいわ。

「そう、そう。もう一つ用事があったて今日は来たのよ」そういいながら土間は、カバンの中から、小さな袋を取り出した。

「何？」御子が土間から袋を受け取る。

「これをね、子供が生まれるまで持ってなさい。効果、抜群よ」

御子が袋を開けると、中から古びた小さなお守りが出て来た。安産のお守りらしい。

「これはね。富士子がハルオを生む時に、私が持たせてやったお守りなの。富士子も出産前に私が散々心配かけたから、妊婦としては決している環境じゃ無かったけれど、それでもハルオは元気に生まれて来たわ。これを持ってさえいれば、きっとあんなの子も元気に生まれて来ると思うの」

「土間……」

御子は感慨深かった。土間が過去を語るのは、決して心やすい事ではない事は分かっているから。きっと礼似も同じように思っているだろう。

「ありがとう。大切に身につけるわ。良平のお守りと一緒に」

御子は以前、良平からお守り代わりの品を受け取っている。彼の失った足が組を守ろうとしてうけた弾丸を、小袋に入れて肌身離さず身につけているのだ。

御子は心の中で子供に語りかける。あんたって、生まれる前から幸せ者よ。こんなにいろんな愛情を受けて生まれる事が出来るんだから。

「ね、出来ればそのお守りは、無事に子供が生まれた時には、ハルオに渡してやつてもらえないかしら？ 私、富士子と暮らした部屋を引き払った時に、あらかたの荷物を処分してしまったのよ。だからこれは数少ない、ハルオにとっての母親の形見の品なの」

「分かったわ。必ず渡す。それに、必ず元気な子を産むわ。千里眼なんて気にならなくなるぐらいに、元気な子に育てるわ」

御子は小さなお守りを、いとおしそうに手の中に包み込んだ。

「その意気、その意気。やっぱり御子はこうでなくっちゃ」礼似も嬉しそうに言う。

「そうよ、礼似。あんたの合いの手は、私が一番入れられるんだからね」御子も明るい笑顔を見せている。

「なんでもいいけど、二人ともほどほどに頼むよ。今組長は尋常じゃないんだ。御子が笑っても、怒っても、この世の終わりみたいの大騒ぎだ。でなくても賑やかうちが、一層騒がしくて大変なんだからな」

良平がそんな事を愚痴っていると、

「良平！ 御子の部屋の掃除はすんだのか？ 赤ん坊にほこりの影響が出たら、大変だぞ！ 隅々までしっかり掃除してくれ！」組長が部屋の奥から大声をあげる。

「はい、はい！ 今すぐやります！」良平も奥に向かって叫ぶ。

「これが数カ月も続くと思うと……。疲れるなあ」

そういいながら掃除機を抱えて部屋の奥へと姿を消した良平を送りながら、三人は、心行くまで笑い転げていたのである。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647s/>

こてつ物語 7

2011年8月30日03時35分発行